

プッチーニ:「ラ・ボエーム」全4幕

Giacomo Puccini: La Boheme (1896年初演)

台本:ジュゼッペ・ジャコーザ、ルイーダ・イリッカ

=====

演出:フランコ・ゼツフィレルリ

指揮:ステファノー・ランザーニ

メトロポリタン歌劇場管弦楽団及び合唱団(ニューヨーク)

ミミ:クリスティーヌ・オポライス(ソプラノ)

ロドルフォ:ビットーリオ・グリゴーロ(テノール)

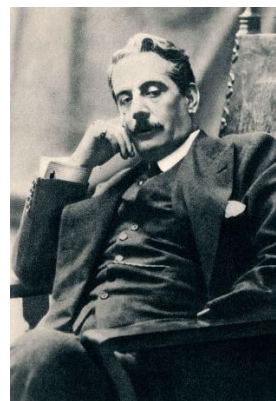
ムゼッタ:スザンナ・フィリップス(ソプラノ)

マルチェット:マッシモ・カバレッティ(バリトン)

ショナール:パトリック・カルフィッツィ(バリトン)

コルリーネ:オレン・グラドウス(バス)

2014年4月のライブ収録



詩人

ロドルフォ



ミミ



ムゼッタ



画家

マルチェット



音楽家

ショナール



哲学者

コルリーネ

あらすじ

第1幕 パリの屋根裏部屋

ボヘミアンの詩人ロドルフォ、画家のマルチェット、それに帰ってきた哲学者コルリーネが寒くて震えているところへ音楽家ショナールが銀貨やワインを持ち帰り、すぐにお祭り騒ぎが始まる。家賃の催促に来たベノアもうまく言いくめて追い返し、彼らは街に繰り出すことにするが、「もう少し原稿を書きたい」ロドルフォは残る。そこにお針子ミミがろうそくの火をもらいに現れる。ロドルフォは青白い顔をしたミミを介抱し、互いに自己紹介しあう。ミミが帰ろうとドアを開けると風で部屋のろうそくも消えてしまう。ミミが落とした鍵を真っ暗な中で探すうちにふたりの手が触れ合う。恋に落ちたふたりは、友人たちのもとへと腕をくんで出かけていく。

第2幕 クリスマス・イヴのカルティエ・ラタン

ロドルフォはカフェ・モミュスで彼女を友人たちに紹介する。そこに老パトロンのアルチンドロを従えたムゼッタが登場。彼女とマルチェッロは別れたとはいえ互いに惹かれ合っている。知らんふりを決め込むマルチェッロ。ムゼッタは男たちに美しい脚を見せびらかす。嫉妬のあまり悶絶するマルチェッロを見たムゼッタは、老パトロンの「靴を買ってきて！」と追い払いマルチェッロの腕の中に飛び込む。若者たちは給仕が持ってきた高額の勘定書に慌てるが、ムゼッタは「さっきの紳士と一緒に払うは」と言い、彼らは雑踏の中帰っていく。

第3幕 雪の朝のアンフェール関門

真冬の凍てつく早朝、物売りたちがパリに入る税関の門が開くのを待っている。門のそばの酒場からムゼッタの嬌声が聞こえる。そこにミミが現れ、呼び出してもらったマルチェッロに「ロドルフォが去ってしまった」と訴える。酒場で眠っていたロドルフォが出てきて、ミミは物陰に姿を隠す。マルチェッロに真意を問われたロドルフォは「不治の病で日に日に弱っているミミを見ているのがつらい」と告白する。その話を聞いていたミミは啜り泣く。ふたりは「せめて春になったら別れましょう」と語り合う。男たちに媚を売るムゼッタと、それに嫉妬するマルチェッロは、罵りあいながらその場で別れを告げる。

第4幕 ふたたび屋根裏部屋

数ヶ月後。恋人への未練を断ち切れないロドルフォとマルチェッロが、コルリーネとシヨナールを交えて騒いでいるところにムゼッタが飛び込んでくる。子爵の息子の元を逃げ出して「愛する人のところで死にたい」と言うミミを探し出して連れてきたが、もう階段を上る力もないと言う。友人たちがそれぞれ気を利かせて部屋を出た後、ふたりきりのミミとロドルフォは語り合う。仲間たちが戻り、ムゼッタは寒がるミミの手にマフを渡す。シヨナールがミミの様子を覗き込むと彼女は静かに息を引き取っていた。仲間たちの様子に異変を悟ったロドルフォは、ミミの亡骸を抱きしめて慟哭する。
(新国立劇場 2023 年 6 月公演プログラムより)

・ 鑑賞のポイント

甘く切ない音楽

ボヘミアンたちの軽妙なやりとり

クリスマス・イヴの雑踏(第2幕)と、寒々とした冬景色(第3幕)の舞台

など